第４６回全国公民館研究大会に参加して

　　　　　　　　　　　　委員長　　仲村　貴介

初日は瀬戸内国際芸術祭総合ディレクターの北川フラム氏の講演だった。氏は2000年から全国６ヶ所で芸術祭を開催しており、能登半島の珠洲市でも昨年末から奥能登国際芸術祭が行われていた。伝統行事、食事、上場企業の誘致などで盛り上がりつつあったが、今年震災と水害に見舞われ残ったのは公民館と保育園、避難所だった。

世界最大といわれる瀬戸内国際芸術祭は「豊かな島の復権」を目的に始まった。氏の芸術祭は地域を歩くツアー型が特徴で、その内容はアート、建築、民俗、生活を融合させ人々の交流を促すというものだった。

私は以前、鹿児島県の自治公民館長、豊重哲郎氏の話をきいた。氏はどぶろく作りなどで得た資金で空き家を修繕し、芸術家を住まわせるということをやっていた。私は、「豊かさ」とは心の充足感を示すものだと考えていて、マズローの欲求段階説では芸術的なものは最上位の5段階目に位置するものと思っていた。しかし、北川氏は産業が衰退し人口が減る島の生活とアートを融合させている。そして、この芸術祭を機に島に移住者が増え、廃校だった小中学校が復活するという奇跡まで起きている。

私も芸術祭開催中に直島に二度ほど足を運んだことがある。確かに草間彌生など主張の強い展示物もあるが、多くは民家に溶け込み、潮騒を聞きながらゆっくりとした時間と心の平穏を与えてくれるものだった。理系の私にはそれまで縁がなかったが、芸術を普段の生活に上手に取り込むことで心の充足感が上がるなら、そのセンスを磨いていきたいし、この町全体をアートと融合させていくのも面白いのではないかと思った。

２日目は「地域の防災・減災」分科会に参加。実践発表の1例目は境港市の渡公民館が取り組んでいる「子ども防災合宿」。青少年育成部会、おやじの会、ＰＴＡ、生活改善委員会、消防団、見守りボランティアなどと協力し、小学校高学年を対象に防災にちなんだ合宿を行っている。子どもたちの防災意識は高まり避難所運営の課題を見出すほどになっている。

越知町でも町内の防災士が集い、防災合宿をしてみようという話し合いをしたことがある。まだ実現していないが、やってみる価値はありそうだ。

2例目は土佐清水市中央公民館の岩井館長より「死者ゼロを目指して」というテーマで発表があった。市内の公民館は中央公民館のみで３名の職員が常駐している。放課後子ども教室の事業を受け、放課後は子どもたちで賑やかだという。土佐清水市は南海トラフ地震で最大３４メートルの津波予報があり、避難訓練などの防災対策のほか防犯対応法なども行っている。その中で協働精神が養われ、責任感の芽生え、気づきや発見などの効果が出ている。

岩井館長とは何度か会合で会っているが、とにかく住民のために積極的に活動されている。子どもたちだけでなく、高齢者向けにスマホやパソコンの教室を開いたり、公民館が住民の役に立っている。これは公民館専従の職員が置かれていることが大きいと思う。

現在、全国的に公民館活動は低迷している。防災や防犯面ではコミュニケーションがたいへん重要であることは説明の必要もないだろう。公民館が地域のニーズを叶えていくコミュニケーションの場として、利用しやすいものになるよう考えていきたい。